

# 四国横断自動車道建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査概報

平成3年度

1992.2

香川県教育委員会  
(財)香川県埋蔵文化財調査センター  
日本道路公団高松建設局

## 例　　言

1. 本書は、四国横断自動車道（高松～善通寺）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報で、平成3年度事業概要を収録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が日本道路公団高松建設局から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財團法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 調査組織（平成3年度）

財團法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括所長	松本 豊胤		
次長	安藤 道雄		
総務係長	加藤 正司	(～平成3年5月31日)	
係長	土井 茂樹	(平成3年6月1日～)	
主査	山地 修	(～平成3年5月31日)	
係長	今田 修	(平成3年6月1日～)	
主任主事	斎藤 政好		
調査係長	渡部 明夫	主任技師	真下 拓也
係長	真鍋 昌宏	技師	山下 平重
主任技師	大西 義則	技師	森下 英治
主任技師	真鍋 嘉宏	調査技術員	高橋 佳緒里
主任技師	西岡 達哉	調査技術員	白川 悅代

4. 調査にあたって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）  
香川県土木部横断道対策室、同善通寺土木事務所横断道対策課、同坂出土木事務所横断道対策課、同高松土木事務所横断道対策課、普通寺市都市計画課、坂出市瀬戸大橋・横断道対策室、坂出市川津公民館、四国横断自動車道建設普通寺龍川地区対策協議会、同坂出市川津連合対策協議会、同坂出市中塚地区対策協議会、同坂出市西又地区対策協議会、同高松市中間地区対策協議会、各地元自治会

5. 概報の作成は、財團法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。  
本書の執筆は各遺跡調査担当職員が分担し、編集は真鍋昌宏が担当した。

6. 本概報で用いる方位の北は、国土地理院第IV系の北であり、標高はT.P.を基準としている。

また、遺構は下記の略号により表示している。

S A	柵列	S B	掘立柱建物跡	S D	溝状遺構
S E	井戸	S H	堅穴住居跡	S K	土坑
S P	柱穴	S R	自然河川	S T	埋葬遺構
S X	不明遺構				

7. 採図の一部に国土地理院地形図（1/25,000・1/50,000）を使用した。

## 本文目次

I 平成3年度発掘調査事業概要	1
II 各遺跡の調査	3
1. 龍川四条遺跡	3
2. 川津東山田遺跡Ⅰ区	7
3. 川津中塚遺跡Ⅰ区	9
4. 川津下塙遺跡	17
5. 川津一ノ又遺跡Ⅲ区	21
6. 中間西井坪遺跡	29

## 挿図目次

第1図 調査遺跡位置図	2
(龍川四条遺跡)	
第2図 遺跡周辺地形図	3
第3図 遺物実測図	3
第4図 遺構配置概略図	4
(川津東山田遺跡Ⅰ区)	
第5図 遺跡周辺地形図	7
第6図 遺構配置概略図	8
(川津中塚遺跡Ⅰ区)	
第7図 遺跡周辺地形図	9
第8図 遺構配置図	10
第9図 調査区全体図	11~12
第10図 土壌窓	13
(川津下塙遺跡)	
第11図 遺跡周辺地形図	17
第12図 遺物実測図	17
第13図 遺構配置概略図	18
(川津一ノ又遺跡Ⅲ区)	
第14図 遺跡周辺地形図	21
第15図 平成3年度調査地区的位置	21
第16図 北部地区土層柱状図	22
第17図 北部地区遺構配置図1 (第1・第2遺構面)	23
第18図 北部地区遺構配置図2 (第3遺構面)	24
第19図 遺物実測図	25
第20図 遺構配置概略図	26
(中間西井坪遺跡)	
第21図 遺跡周辺地形図	29
第22図 平成2・3年度調査区 遺構配置図	30
第23図 3c区石器出土等量線 図	32

第24図	3 c 区16-17間東西	第28図	石器実測図4
	断面図 ..... 33~34		(二次加工のある剥片) ..... 40
第25図	石器実測図1	第29図	石器実測図5
	(舟底形石器) ..... 37		(二次加工のある剥片・ナイフ形石器・石核) ..... 41
第26図	石器実測図2	第30図	石器実測図6(石核) ..... 42
	(舟底形石器) ..... 38		
第27図	石器実測図3		
	(舟底形石器・同未製品) ..... 39		

## 写 真 目 次

<b>(龍川四条遺跡)</b>			
写真1	A地区遺構検出状態 ..... 5	写真12	中世掘立柱建物跡 (西から) ..... 15
写真2	B地区遺構検出状態 (南から) ..... 5	写真13	中世煙跡?(北から) ..... 16
写真3	B地区遺構検出状態 (東から) ..... 6	写真14	遺構検出作業 (南東から) ..... 16
写真4	C地区遺構検出状態 ..... 6	<b>(川津下掘遺跡)</b>	
<b>(川津東山田遺跡I区)</b>		写真15	溝状遺構 ..... 19
写真5	遺構検出状態 ..... 7	写真16	河道跡 ..... 19
<b>(川津中塚遺跡I区)</b>		写真17	自然木出土状態 ..... 20
写真6	航空写真 ..... 10	写真18	杭出土状態 ..... 20
写真7	中世土壙墓(東から) ..... 13	<b>(川津一ノ遺跡III区)</b>	
写真8	大型の柱穴を持つ古墳 時代後期掘立柱建物跡 (東から) ..... 14	写真19	北部地区第2遺構面 ..... 23
写真9	扇付きの中世掘立柱建物跡 (南から) ..... 14	写真20	北部地区第3遺構面 ..... 24
写真10	扇付きの中世掘立柱建物跡 (東から) ..... 15	写真21	遺構検出状態 (北から) ..... 27
写真11	中世掘立柱建物跡	写真22	遺構検出状態 (南から) ..... 27
		写真23	帶金具出土状態 ..... 28
		写真24	水田畦畔状遺構 ..... 28

<b>(中間西井坪遺跡)</b>	
写真25 5 d 区 2 号墳(奥), 3 号墳(手前) .....	43
写真26 5 d 区 2 号墳葺石, 埴輪出土状況 .....	43
写真27 5 d 区 2 号墳周濠上層 盾形埴輪出土状況 .....	44
写真28 5 f 区埴輪溜り .....	44
写真29 3 c 区(南半)旧石器 分布状況 .....	45
写真30 3 c 区舟底形石器 出土状況 .....	45
写真31 5 d 区旧石器調査風景 .....	46
写真32 5 d 区 2 号墳調査風景 .....	46

### 表 目 次

第1表 調査遺跡一覧 .....	1	<b>(中間西井坪遺跡)</b>	
<b>(川津一ノ又遺跡Ⅲ区)</b>		第3表 舟底形石器一覧表 .....	36
第2表 香川県出土の帶金具 一覧表 .....	25		

## I 平成3年度発掘調査事業概要

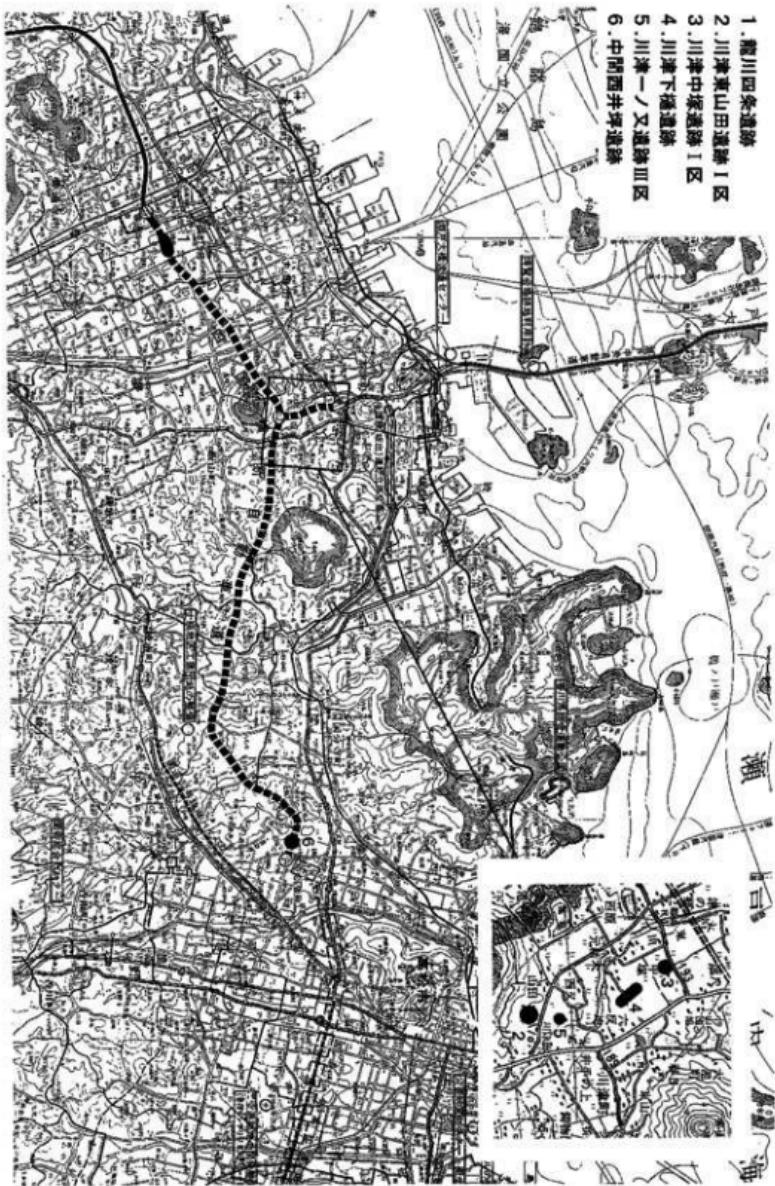
四国横断自動車道（高松～善通寺）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業は、昭和63年4月に開始し、3年6ヶ月を要して平成3年9月末をもって終了した。本年度の調査対象地は、昨年度に調査を実施できなかった未取去家屋跡及び未買収地（合計9,320m<sup>2</sup>）である。調査成果の概要是第1表のとおりである。

同事業に伴う発掘調査においては、多くの成果を得て調査全体を終了したが、調査の詳細な成果については本年度から開始した整理業務を経て順次明らかにしていく予定である。

遺跡名	所在地	調査面積	調査期間	遺構	遺物	担当者
龍川四条遺跡	善通寺市原田町、木徳町	300m <sup>2</sup>	3.4.4～3.6.18	中世一柱穴、溝状遺構	土師器	西岡、真下、白川
川津東山田遺跡1区	坂出市川津町	500m <sup>2</sup>	3.9.2～3.9.4	時期不明一柱穴	土器小破片	西岡、真下、白川
川津中塚遺跡1区	坂出市川津町	5,700m <sup>2</sup>	3.4.4～3.9.13	古墳時代後期一溝状遺構 古代一掘立柱建物跡 中世一掘立柱建物跡、溝状遺構、土塙墓	須恵器、土師器、鉄小刀	山下、真鍋（墓）高橋、森下（英）大西、西岡、真下白川
川津下樋遺跡	坂出市川津町	200m <sup>2</sup>	3.7.1～3.7.16	縄文時代晚期～弥生時代前期一自然河川	縄文晚期上器、打製石包丁	西岡、真下、白川
川津一ノ又遺跡4区	坂出市川津町	1,350m <sup>2</sup>	3.7.18～3.9.27	弥生時代一自然河川 弥生時代～古墳時代一土坑、溝状遺構 古代一水田、溝状遺構 中世一水田、溝状遺構	須恵器、土師器、須恵器、帶金具（巡方）土師器	森下（英）、大西、西岡、真下、白川
中間西井坪遺跡	高松市中間町	1,270m <sup>2</sup>	3.4.5～3.7.18	旧石器時代一ブロック 古墳時代一古墳 古代～中世一溝状遺構	旧石器（舟底形石器、ナイフ形石器等）、埴輪	森下（英）、大西
計		9,320m <sup>2</sup>			土師器等	

第1表 調査遺跡一覧

1. 鶴川四条道路
2. 川津東山田道路 I 区
3. 川津中塙道路 I 区
4. 川津下橋道路
5. 川津一ノ又道路 III 区
6. 中間西井岸道路



第1図 調査道路位置図

## II 各遺跡の調査

### 1. 龍川四条遺跡

本遺跡については、過去2年間の発掘調査により、断続的ではあるが縄文時代晚期から鎌倉時代に至る複合遺跡としての性格を有する事実が判明している。

とりわけ、本年度の調査対象地に隣接する地域においては、鎌倉時代の掘立柱建物跡、井戸跡、墓状遺構等が集中する状態を明らかにしており、周辺地域に当該時期の集落跡が広がることを予測させる成果が得られている。

そこで、本年度の調査は、建物遺構の検出と集落域の確定、さらには墓状遺構の付帯施設の存否の検証を軸として、現普通寺市域における中世前期の村落形態を解明することを最終目的とした。

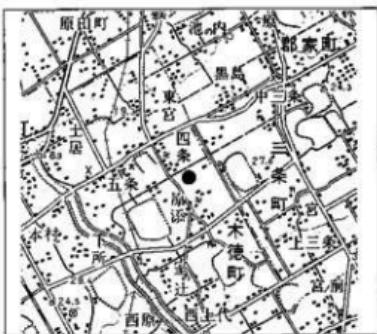
なお、調査区の設定については、既知の遺構群の延長部分の検出が可能であると考えられる地点のみに限定する方法を探った。また本書では、便宜上各調査区をA～C地区と呼称して報告している。

今回検出した遺構には、柱穴群と溝状遺構がある。以下に前者の位置関係と遺構密度の解説を行うことにより、上記の課題の究明作業の導入としたい。

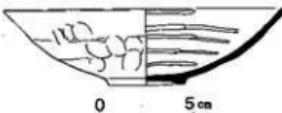
まず、A地区西半部において、遺構の空白地域が存在することから、遺構群の検出位置は推定集落域の東縁辺部に偏在することが判る。また、同集落域については、昨年度調査の結果、中央部分に無住地帯を見いだし得ることから、建物遺構の主体が、井戸跡周辺部の南北方向に狭小な範囲に営まれたことが容易に理解できる。

さらに、建物跡を構成する遺構が少數に限られる事実から、複数の家屋の集合体による村落形態を復元することは困難である。したがって、いわゆる集村形態を形成しない段階に相当する村落を想定することが可能ではないかと考えている。

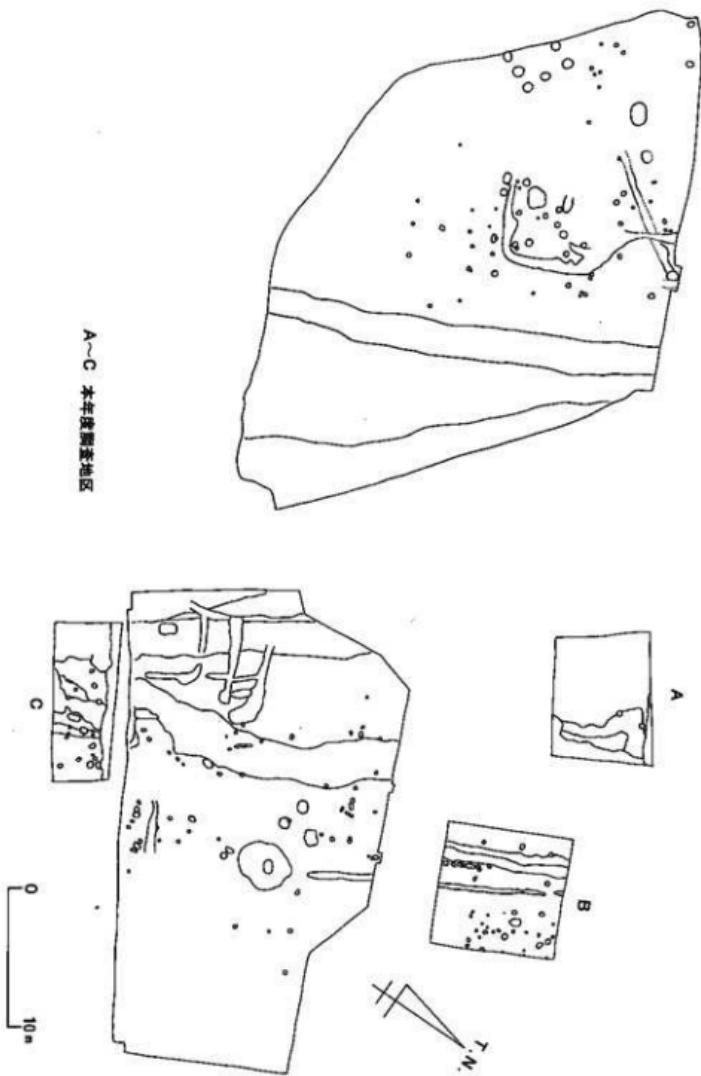
ただし、集落域の南北端部分が確認できていないことから、上記の仮説は根拠が薄弱ではあるが、集落形態と規模を明確にする作業を経ることにより、近接する井戸跡及び墓状遺構との有機的な関係の解明や、集落構造の究明が容易になると考えられる。



第2図 遺跡周辺地形図



第3図 遺物実測図



第4圖 造構配置略圖

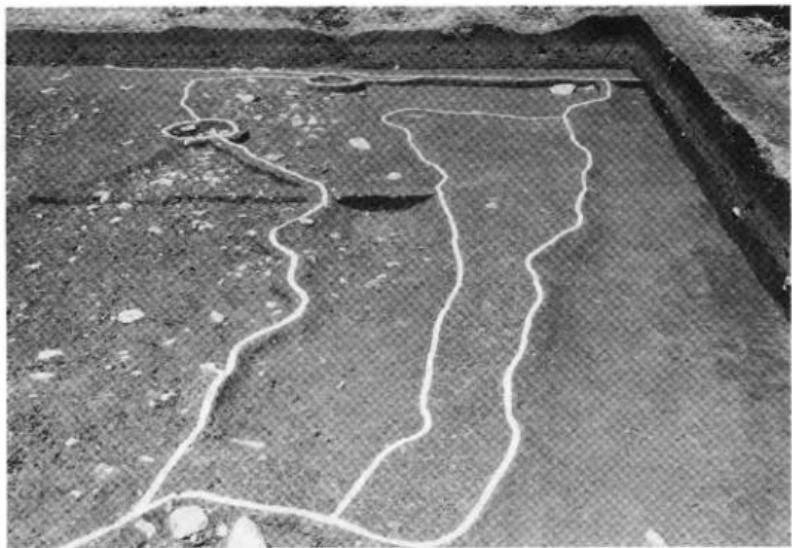


写真1 A地区遺構検出状態

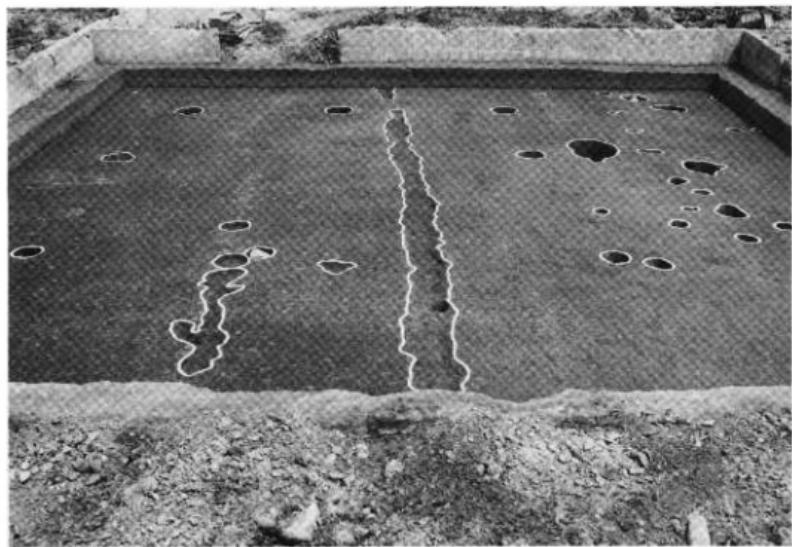


写真2 B地区遺構検出状態（南から）

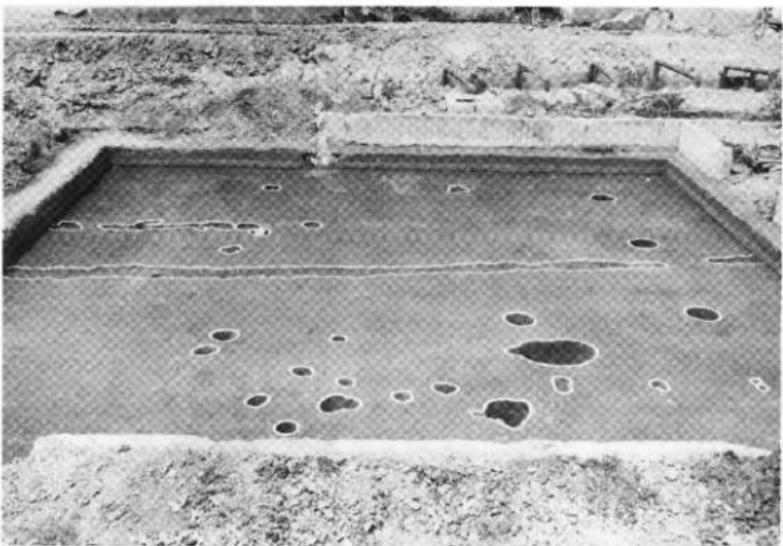


写真3 B地区遺構検出状態(東から)

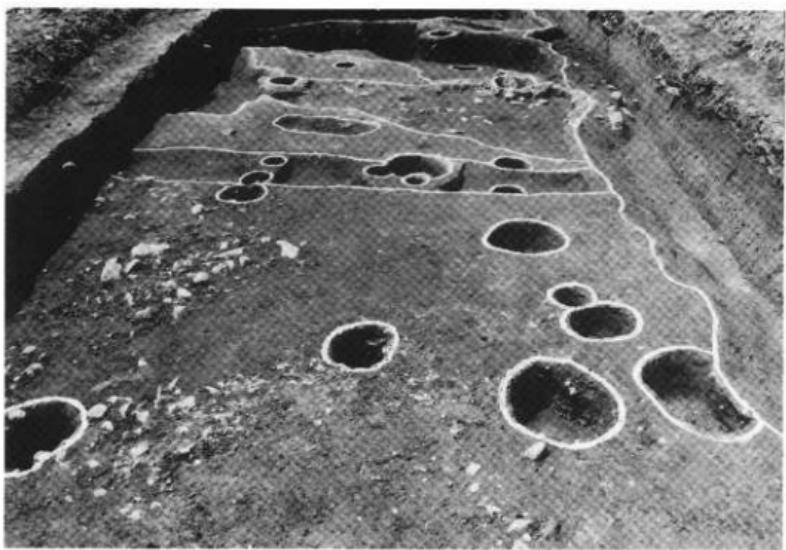


写真4 C地区遺構検出状態

## 2. 東山田遺跡 I 区

昨年度の発掘調査の結果、弥生時代後期の集落跡を中心とした複合遺跡としての性格を有する点と、鎌倉時代以降、無住地化した事実が判明している。

また、集落城は飯野山北麓の緩い傾斜地において検出されており、調査対象地の西南半部の急傾斜地については、集落の外部であると推察し得る知見を得ている。

本年度調査では、地形の変化点に位置する家屋跡が対象地となるため、上記の推察を検証することを目的とした調査を実施した。

調査の方法は、隣接地において遺構が検出されていない点を考慮し、まず小規模なトレンチを設定することにより、部分的な調査を行うことから開始した。

この結果、掘削及び埋没時期が判然としない小規模な柱穴群を検出したが、集落を構成する遺構を検出するには至らなかった。このことから、上記の推察が誤っていないことを確認し、当初の目的が果たせたとの判断により、掘削範囲を拡大することなく調査を終了した。

なお、出土した遺物は全て小破片であり、図化することができなかった。



第5図 遺跡周辺地形図



写真5 遺構検出状態



第6圖 遺構配置概略図

### 3. 川津中塚遺跡 I 区

当遺跡は丸龜平野の東端に位置し、現大東川東岸の平地部に立地する。昨年度は当遺跡の南半部である II 区調査区全部と北半部である I 区調査区の一部の調査を行い、今年度は I 区調査区の残りの部分の調査を行った。以下今年度調査区について述べる。

調査区内の微地形は、中央ほぼ南北方向にいわゆる地山である白黄色シルト層の盛上がりがあり、微高地状を呈している。その周囲には遺物包含層の堆積がみられる。また調査区北西部にも微高地がある。検出された遺構・遺物は弥生時代後期から中世前期にかけてのものであり、最も多く検出された遺構は古墳時代後期に埋没した溝跡と、中世前期の掘立柱建物跡である。

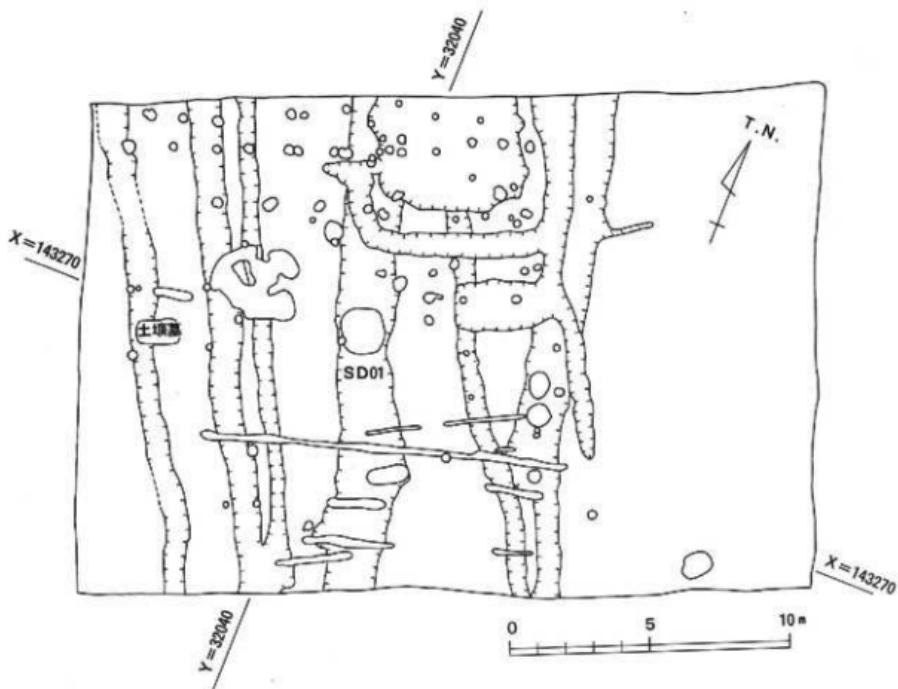


第 7 図 遺跡周辺地形図

弥生時代後期の遺構は、溝跡 2 条である。このうち S D01 (第 9 図) は古墳時代後期に埋没しているが、II 区調査区より連続し、幅が広く、また中央微高地のなかでも最も高い部分に掘削されていることから、微高地周囲へ水を送る幹線水路的な役割をしていたものと考えられる。

古墳時代後期の遺構は溝跡数条と、昨年度調査区で一部が検出されていた掘立柱建物跡 1 棟である。この掘立柱建物跡より南においては古代の掘立柱建物跡が検出されず、調査区北側に隣接する下川津遺跡から続く古代の集落跡の範囲は、昨年度調査時に想定されていたように、当調査区北部までであることが判明した。

中世前期の遺構は掘立柱建物跡と溝跡である。土塙墓 1 基もこの時期と考えられる。掘立柱建物跡は中央微高地と北西微高地にあり、廐付きの建物が想定できるものがある。第 9 図で示しているものは現段階で復元できているものである。微高地周囲には平行する小溝跡群が存在する。特に、中央微高地西側には約 3 m の間隔で平行する溝跡群が南北に長く延びている。このような溝跡は畑跡に関連するものと考えられるが、一部格子状になっている部分もあり、その性格については検討課題としたい。土塙墓 (第 10 図) からは、土師質土器の皿と鉄小刀が出土している。腐朽が激しく明確ではないが板状の木材が底面に残存していたことから木棺墓の可能性もある。なお墓と判明したのは、底面近くの埋土を水洗した際に骨片を探集できたためである。従来、垂直に近い掘り方の土坑は墓である可能性が大きいとされてきたが、土坑底面の埋土を水洗いすることにより、墓であると判定する作業をもっと積極的に行う必要がある。

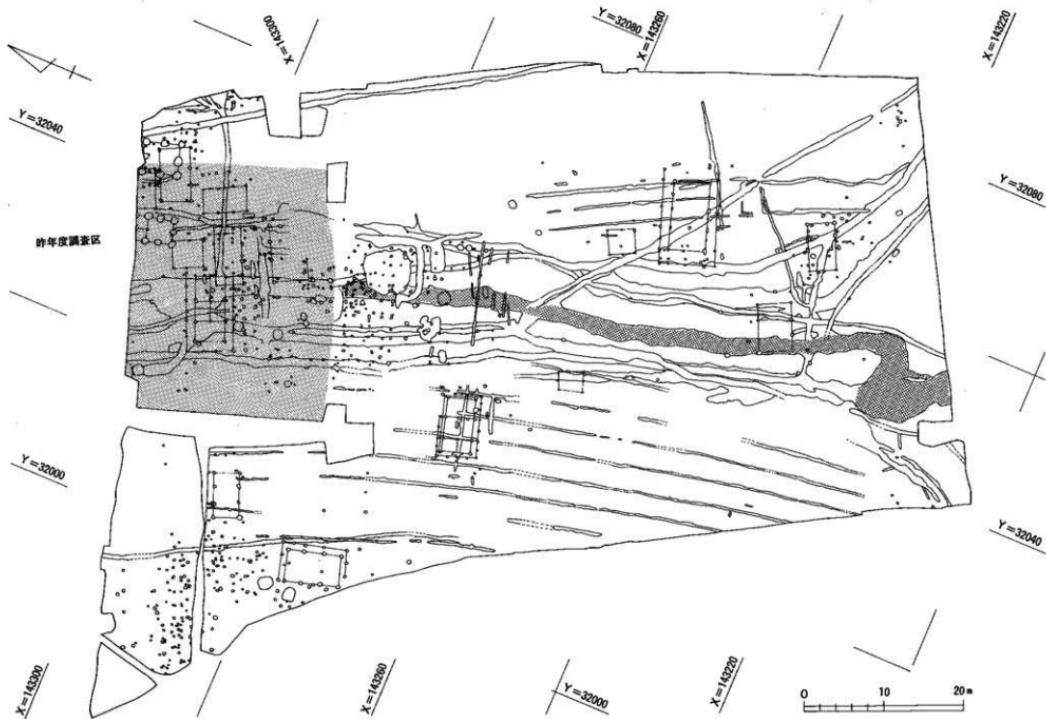


第8図 遺構配置図

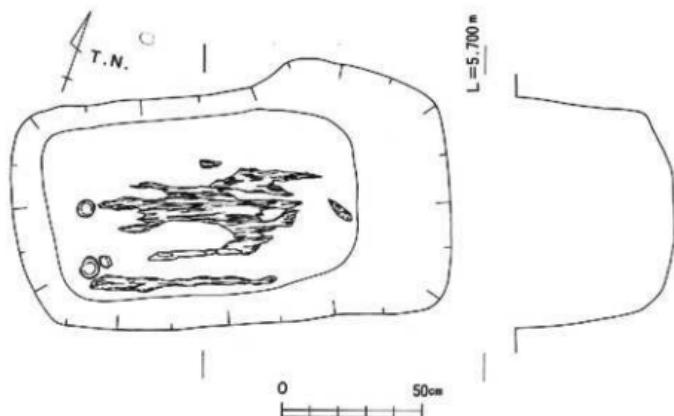


写真6 航空写真

上図調査区を南から撮影  
したものである。



第9図 調査区全体図



第 10 図 土 墓



写 真 7 中世土壤墓



写真8 大型の柱穴を持つ古墳時代後期掘立柱建物跡（東から）

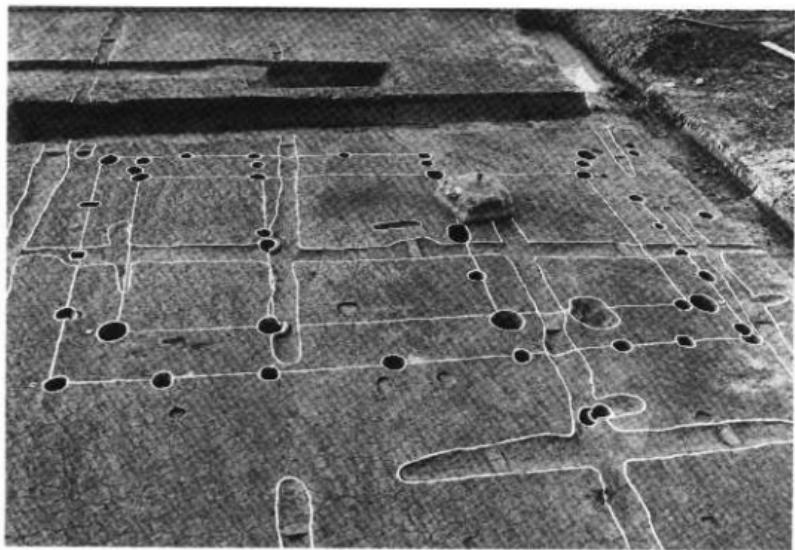


写真9 麻付きの中世掘立柱建物跡（南から）

写真 10  
麻付きの中世掘立柱  
建物跡（東から）

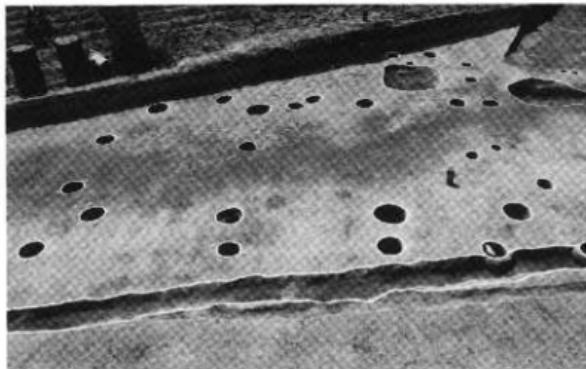


写真 11  
中世掘立柱建物跡  
(西から)



写真 12  
中世掘立柱建物跡  
(西から)

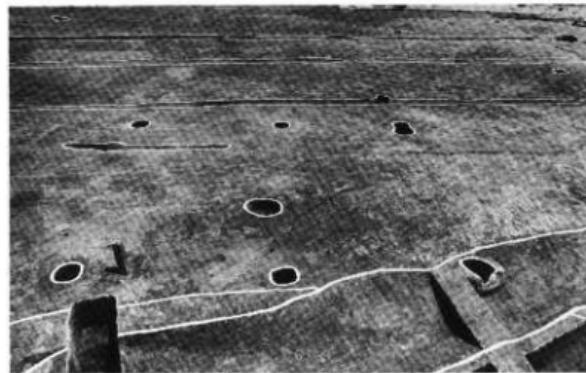




写真 13 中世畠跡？（北から）



写真 14 遺構検出作業（南東から）

#### 4. 川津下樋遺跡

本遺跡については、現大東川北岸の凹地形を利用した。弥生時代以後中世に至る水田遺跡としての性格を有している。昨年度の調査で弥生時代前期に埋没した自然河川内に構築された合掌型井堰を検出しており、同時期に既に高度な灌漑技術が存在したことを見定し得る成果が得られていた。

本年度は調査範囲を家屋跡の一部分に限定し、上記の河川の延長部分の調査を行い、同遺構に類する施設の検出を試みた。

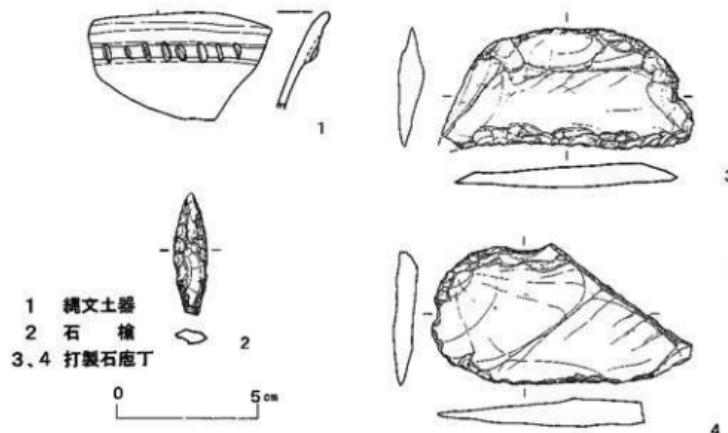
調査の結果、複数の溝状遺構と自然河川を検出したが、井堰をはじめ水田耕作に関連する遺構の



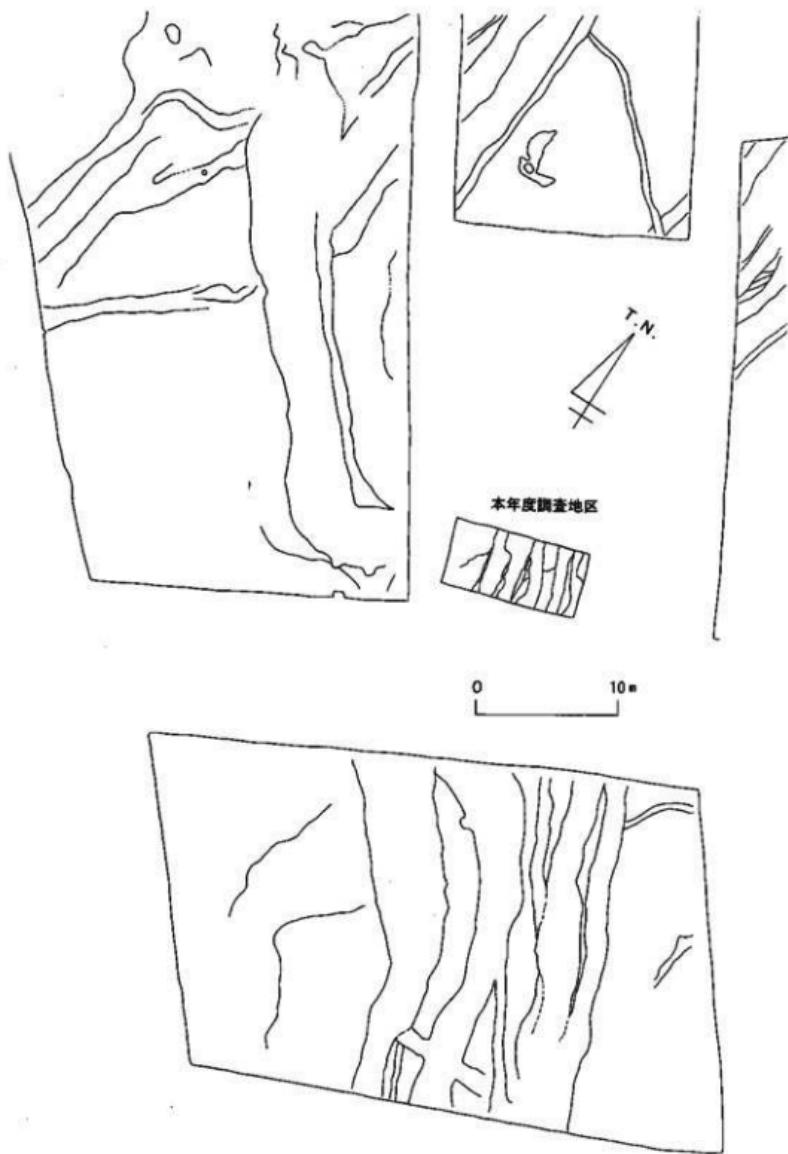
第 11 図 遺跡周辺地形図

存在を確認することは出来なかった。なお、当該地区の自然河川は、北東方向へ通水したことが推測できることから、上記河川から本地点において分岐した遺構であると考えられる。また、同遺構より縄文時代後半頃の刻目突帯文を有する深鉢の口縁部(1)と打製石斧(3)が出土している。

最後に、報告書作成作業時においては、遺跡単独の変遷を追及することは言うまでもないが、隣接する居住区との関連を看過せぬよう注意する必要がある。



第 12 図 遺物実測図



第13図 透構配置概略図

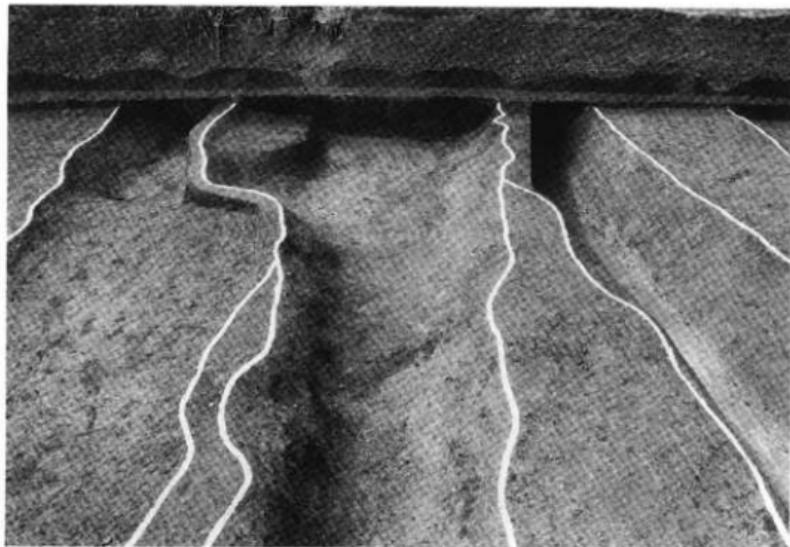


写真15 溝状遺構

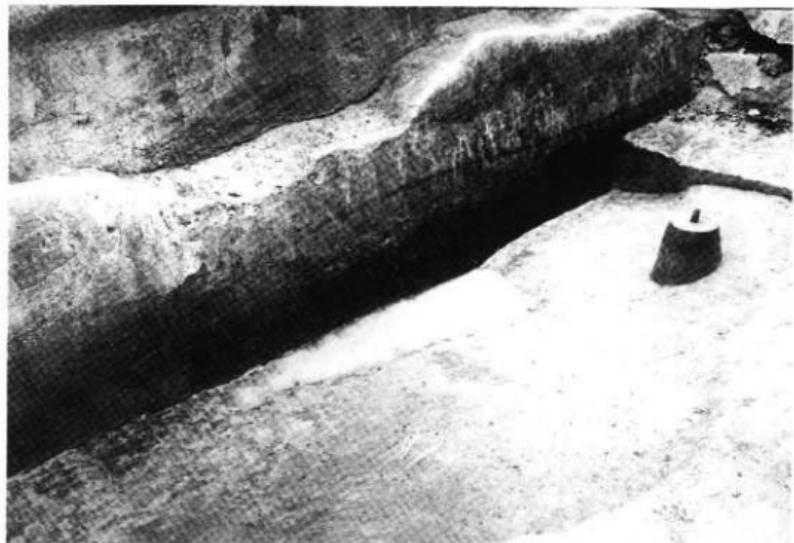


写真16 河道跡



写真 17 自然木出土状態

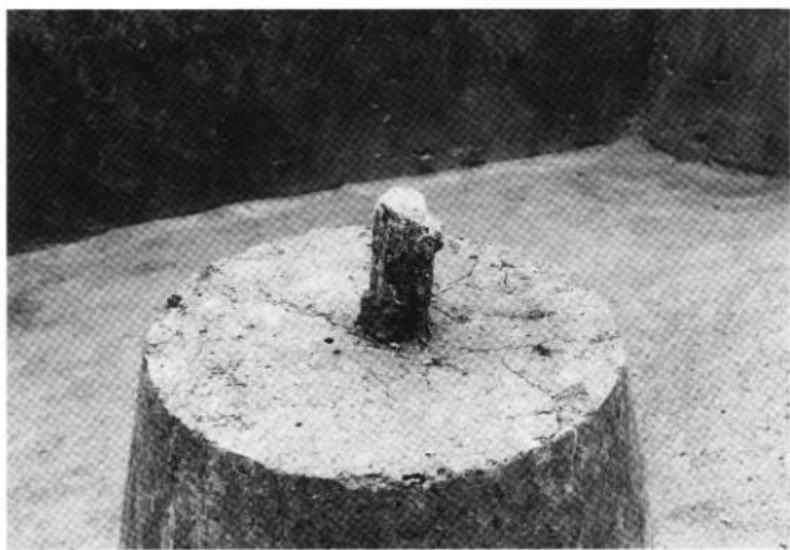


写真 18 杭出土状態

## 5. 川津一ノ又遺跡III区

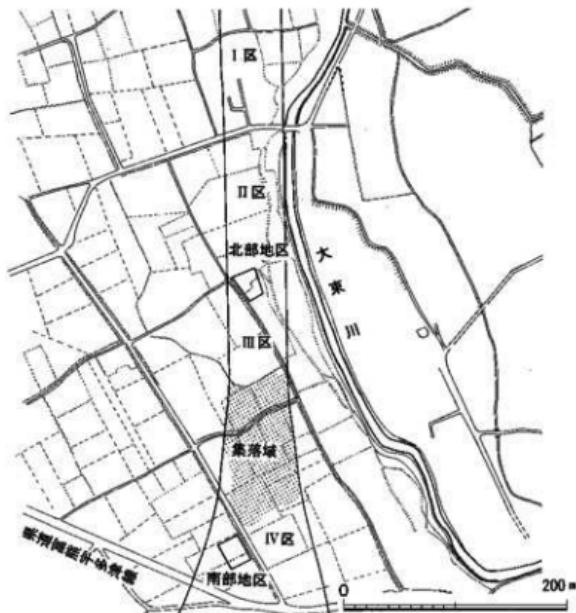
### (1) はじめに

本遺跡は飯野山北側、大東川流域の平野部に立地する遺跡である。平成2年度に主たる発掘調査が行われ、弥生時代中期～中世にいたる広大な複合遺跡であることが確認されている。遺跡は北からI～IV区に区分し、このうち上記各時期の集落域は主としてIII区・IV区の微高地で検出されている。I区及びII区は大東川の氾濫原に属し、III区の北辺では低湿地域において自然河川や水田跡がみられ、またIV区南縁の低湿地域においても同様な遺構が検出されている。



第14図 遺跡周辺地形図

今年度の発掘調査は、昨年度段階で物件取去の関係上調査に着手できなかった北部地区(600m<sup>2</sup>)と南部地区(750m<sup>2</sup>)がその対象となった。北部地区は集落城北側の低湿地域に、また南部地区は微高地の南西縁に属す。



第15図 平成3年度調査地区の位置

## (2) 北部地区的調査

当該地区は昨年度調査の成果から、弥生時代～古墳時代後期の自然河川の合流地点となるため、全城が低湿地域と予想された。

調査の結果、当該調査区の北辺3mほどは黄色シルトをベースとする微高地が存在した。微高地以南は弥生中期土器を出土する自然河川によって開析され、弥生後期以降低湿地域として土地利用がなされている。

第1造構面では3b層(洪水砂)で埋没した中世の水田面および用水路3条(SD-01～03)を検出した。畔は用水路沿いに部分的に検出したのみである。水口を一ヵ所確認した。

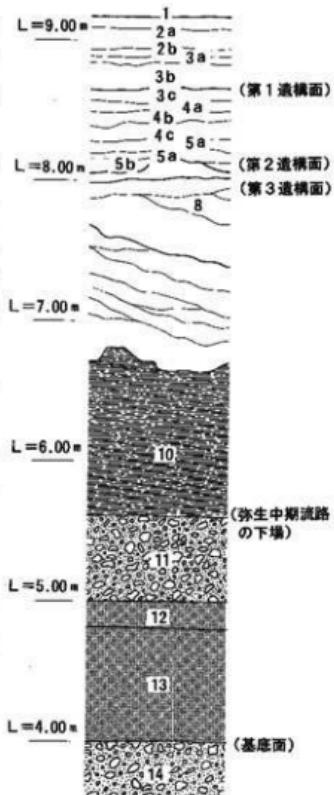
第2造構面では5b層(洪水砂)で埋没した奈良時代

の水田面を検出した。一筆が $7 \times 5.5$ mの規模をもち、北に裾を広げる台形状の平面形態を呈す。この面は下層のSR-01の埋没途上の面に相当し、SR-01の北肩との比高差は0.6mを測る。

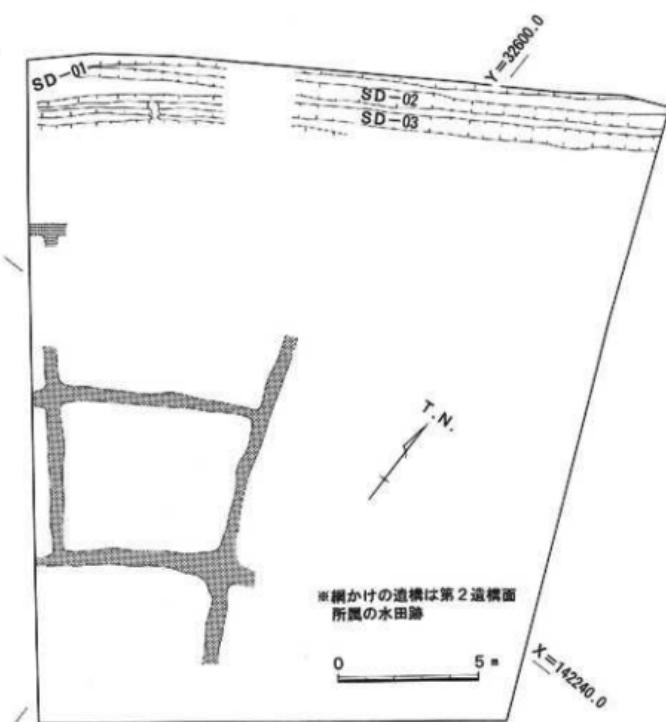
第3造構面では弥生時代後期末～古墳時代末の自然河川および時期不明の土坑、溝を検出した。自然河川からは古墳時代末の獸骨を多く採集した。土坑については埋土中に炭化物を大量に持つものがあるがその性格は不明である。SXとしたものは木根跡の可能性がある。微高地との比高差は0.7mあり、河辺の遺構として評価できる。

弥生時代中期の自然河川は、上層(8層)に黄色シルト、下層(9層)に粗砂が堆積し、この内9層中に多くの土器が見られた。壺形土器において櫛描文を多用し凹線文が見られない中期中葉の土器群である。9層のさらに下層にシルトと粗砂・礫の互層堆積(10層)がみられ、その下端ラインが自然河川の河床である。

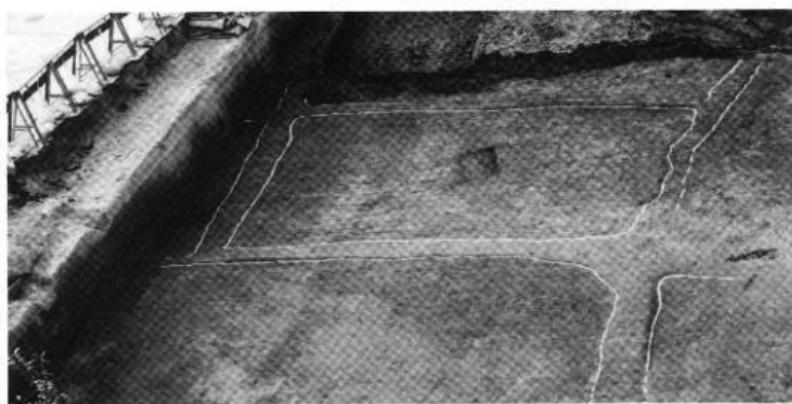
11層は青灰色砂礫層、12層は漆黒色粘土層、13層は褐色粘土層となり最下層の14層で砾状地堆積によると思われる灰色礫層に届く。



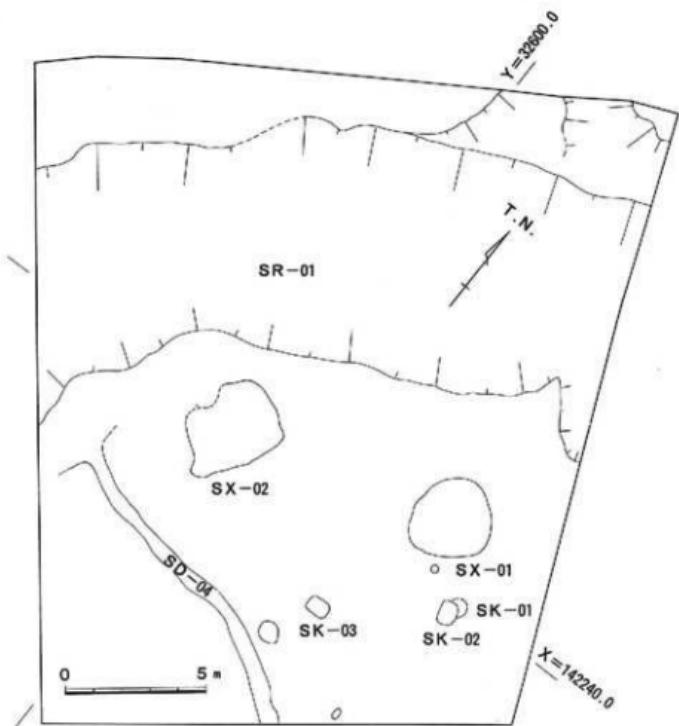
第16図 北部地区土層柱状図



第 17 図 北部地区造構配置図 1 (第1・第2造構面)



写 真 19 北部地区第2造構面



第18図 北部地区造構配置図2(第3造構面)



写真20 北部地区第3造構面

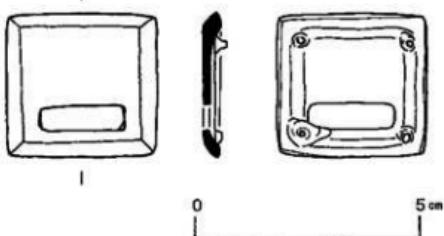
### (3) 南部地区的調査

当該調査対象地については、居住域として利用された微高地が、西方に突出する地点に相当しており、しかも生産域に接觸する位置であることが判明していた。したがって、調査は集落跡と生産遺構の縁辺部の構造を明らかにすることを目的として実施することにしたが、とりわけ、昨年度の調査により検出された、大型の水田畦畔状遺構の末端部分の構造を解明することに、重点を置くこととした。

しかしながら、同遺構の延長部分と想定し得る構造物については、対象地区南西隅部の壁面の観察により、若干部分を確認したにとどまったことから、同遺構が微高地の縁辺部において、収束する形態を呈していたことを示唆する資料が得られたと考えている。

さて、検出した主な遺構としては、南北方向に穿たれた溝状遺構がある。流路は集落跡の内部に導かれておらず、その南端部分が南方の水田跡の一部に接觸している事実から、地形の傾斜面を利用することにより、南方向に通水したことが推測できる。

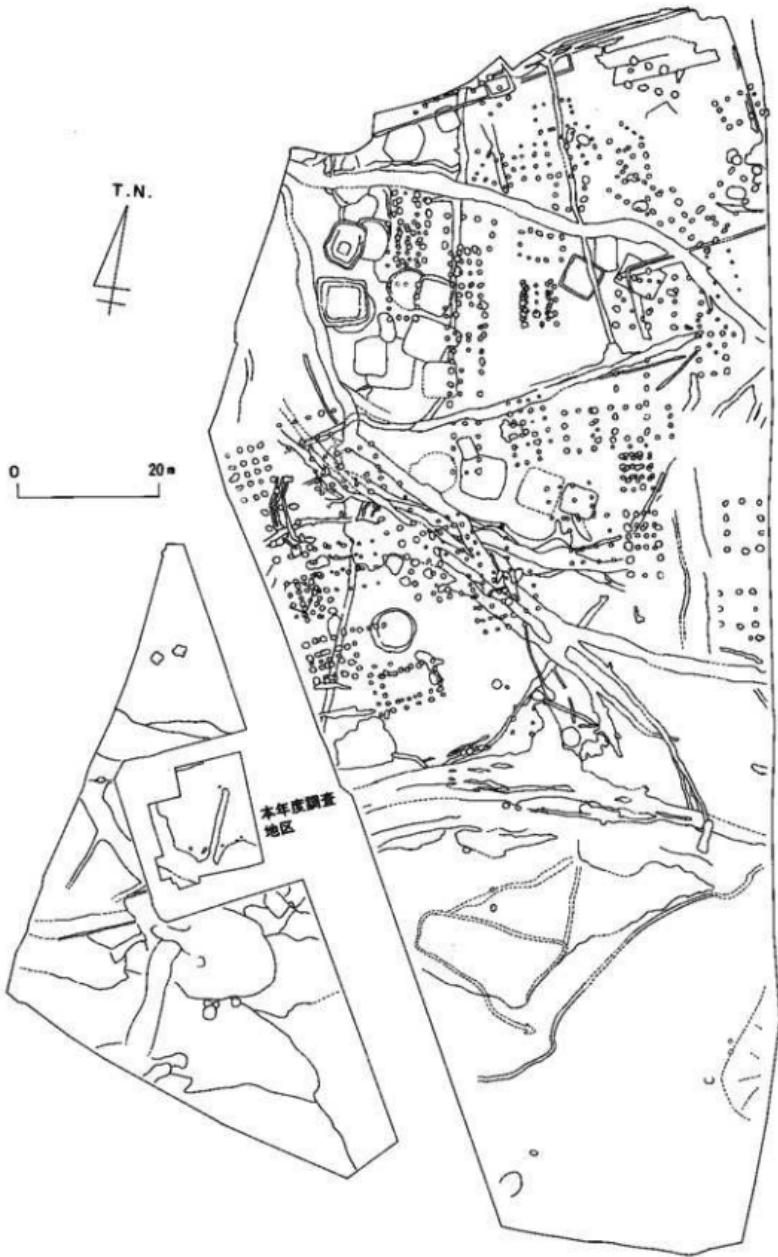
なお、同遺構より銅製の帶金具（巡方）1点を採取した。



第19図 遺物実測図

種類	遺跡名	所在地	法量(cm)		文献
			縱	横	
1	巡方(表)	中村遺跡	30	31	吉嶋昌宏, 1987: 中村遺跡、四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1号。
2	巡方(表)	羽佐島遺跡	26	27	小西正行, 板口裕子, 1984: 羽佐島遺跡(II)。瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告, III。
3	丸筋(表裏)	大浦浜遺跡	15	24	大山喜光, 真鍋昌宏, 1988: 大浦浜遺跡。瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告, V。
4	丸筋(表裏)	"	20	30	"
5	銅具	"	23	33	"
6	巡方(表)	川津一/又遺跡	32	33	
7	巡方(表)	前田東・中村遺跡	21	25	

第2表 香川県出土の帶金具一覧表



第20図 遺構配置概略図

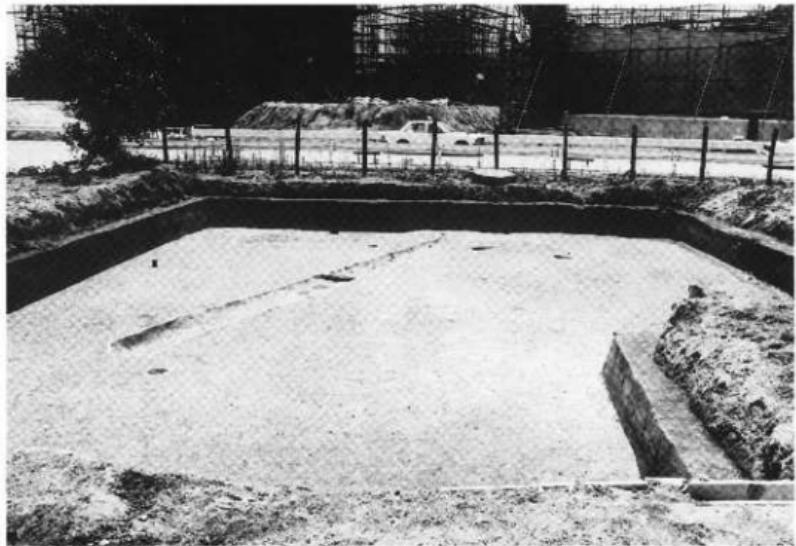


写真 21 　道構検出状態（北から）

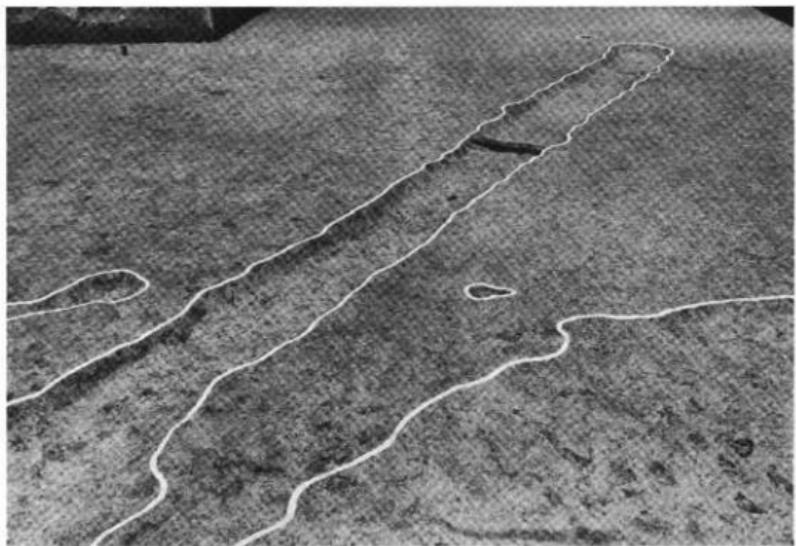


写真 22 　道構検出状態（南から）



写真 23 带金具出土状態

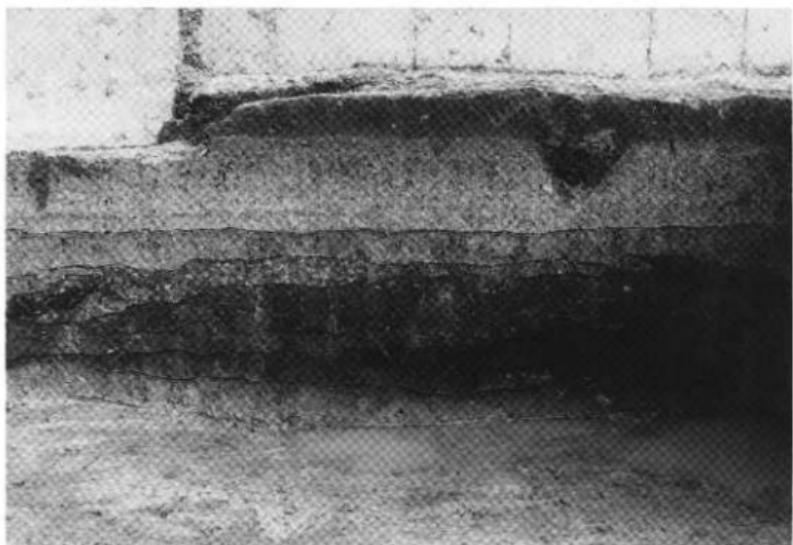


写真 24 水田畦畔状遺構

## 6. 中間西井坪遺跡

### (1) はじめに

本遺跡は高松平野西南部の高松市中間町に所在する。平成元年6月より発掘調査に着手し、平成3年7月まですべての対象地の調査を終了した。今年度は平成2年度調査地周辺において未買取・未退去等の理由により当該年度に着手できなかった残地部分1,270m<sup>2</sup>を対象として調査を実施した。

### (2) 遺跡の立地

高松平野は古東川が形成した広大な扇状地地形が認められることで知られているが、本遺跡の所在する西南部は、国分寺町との境をなす堂山～六ツ目山～伽藍山の独立丘陵群の東縁に相当し、幅約3kmにわたって古香東川の形成した断丘面が認められる箇所である。

また、円錐形独立丘の一つである六ツ目山（標高317m）の裾部に位置する本遺跡周辺は小尾根や小谷が複雑に入り組んだ状況もまた観察できる。

すなわち今回の調査区は、東西を小谷に刻まれた標高36～39mの緩やかな尾根状の地形を呈する断丘面に比定できるものと思われる。

### (3) 調査概要

平成2年度の調査において、当該地区が旧石器を良好な状態で包含していること、埴輪製作にかかるる遺構群が分布すること、3基の前期古墳が認められること、などが明らかになっている。これらの成果をもとに、残地部分の調査を実施した。以下、各調査区の概要を記す。

#### 1) 3c区

平成2年度調査では前期古墳（1号墳）の周濠が確認された3b区の北側にあたる。また、3a区においては4群以上の旧石器ブロックが検出されており、旧石器の出土が予想された。

調査の結果、東西方向の溝状遺構3条（奈良～中世）、弧状に巡る細い溝状遺構1条、埴輪片を含む小土坑1基が検出された。1号墳に伴う周濠は宅地造成段階で削平を受けたものと考えられ、検出できなかった。

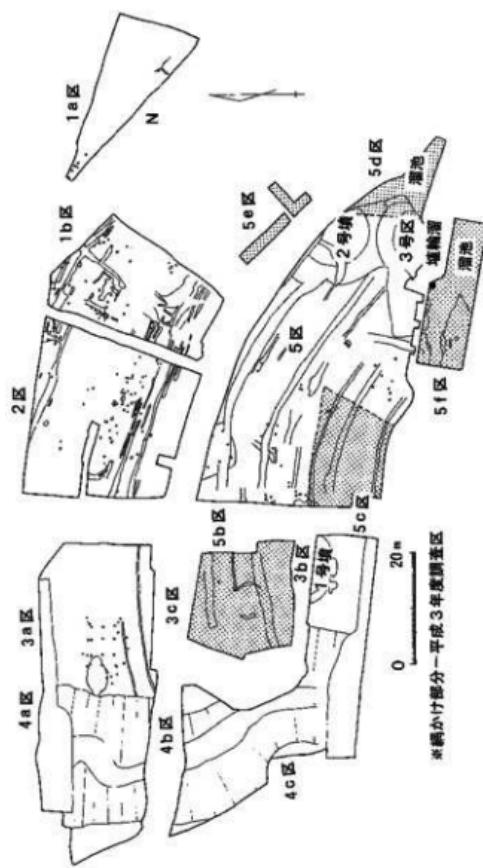
下層では、調査区東半において概ね3群の旧石器ブロックを検出した。微細碎片を含めた出土数は約5,000点に達する。

#### 2) 5b, 5c区

5区の南西隅の残地である。上層において東西方向の溝状遺構（奈良～中世）を3条検出した。下層において旧石器ブロック1群とその周辺の散漫な分布状況を確認した。微細碎片を含めた出土数は188点である。



第21図 遺跡周辺地形図



第22図 平成2・3年度調査区選択配置図

### 3) 5 d 区

5 区の東端に位置する。調査区の大部分は溜池築造や暗渠水路埋設により擾乱を受けており、西端でわずかに古墳 2 基の周濠を確認した。

前方後円墳と推定される 3 号墳の円丘部周濠は浅く不整形ではあるが、南に向かって巡る状況を確認した。埋土中より円筒埴輪片が出土しているが、これらは一様に底場から 15cm ほど浮いた状態であった。

2 号墳では葺石と、それに接する状態で家形埴輪片を確認した。また周濠底場より 15cm~20cm 浮いた状態で盾形埴輪片が出土している。後者は 3 号墳からの転落の可能性がある。

また、両古墳に至近の擾乱土内では形象埴輪を含む多くの埴輪片が出土している。

### 4) 5 e 区

2 号墳の墳形確認のためにトレンチを設定した。しかしながら、削平が著しく、墳形を確認するに至らなかった。

なお、本体工事中に埴輪片を含む周濠状の溝を確認したが、部分的にしか遺存しておらず、2 号墳に継続するものもあるいは別の古墳が存在するのか遺憾ながら判然としない。

### 5) 5 f 区

県道三木国分寺線付け替え工事の終了後、3 号墳の墳形確認のために設定した調査区である。溜池や水道管理設備による擾乱が著しく、遺構面遺存箇所はきわめて少ない。

調査区西半部において奈良時代の包含層が存在し、その下位において溝等の若干の遺構を確認したが、3 号墳に関連する遺構は検出できていない。調査区東半部は擾乱著しい中、円筒埴輪片からなる「埴輪溜り」を一ヵ所確認した。暗褐色粘質土を埋土とする遺構の一部分が遺存したものと考えられるが、遺構の平面形状を把握することは出来ない。

## 6) 小結

今年度の調査では 3 c 区、5 b 区、5 c 区において昨年度に引き続き良好な旧石器資料を得ることができた。特に 3 c 区では濃密な分布を示しており、昨年度の 3 a 区、3 b 区の同様な分布状況を考慮すると、西侧に存在する谷の縁辺部が盛んに石器製作の場として機能していたことが推定される。これに対して、5 b 区、5 c 区では濃密な集中箇所は見られず、比較的散漫な分布を示しており両者の様相の違いが注目される。

5 d ~ 5 f 区において当初の目的とされた 2 基の古墳の墳形確認は前述のごとく削平や擾乱のために、不明瞭のままである。ただし 5 f 区で確認した埴輪溜りについてはこれが 3 号墳に伴うものかどうか今後検討を加える余地がある。

最後に、今年度の調査は盛土を主とする本体工事と平行して行われた関係上、予想を越える厳しい条件の下での調査となった。今後、克服すべき問題の一つと考えられる。

#### (4) 3c区出土の旧石器資料

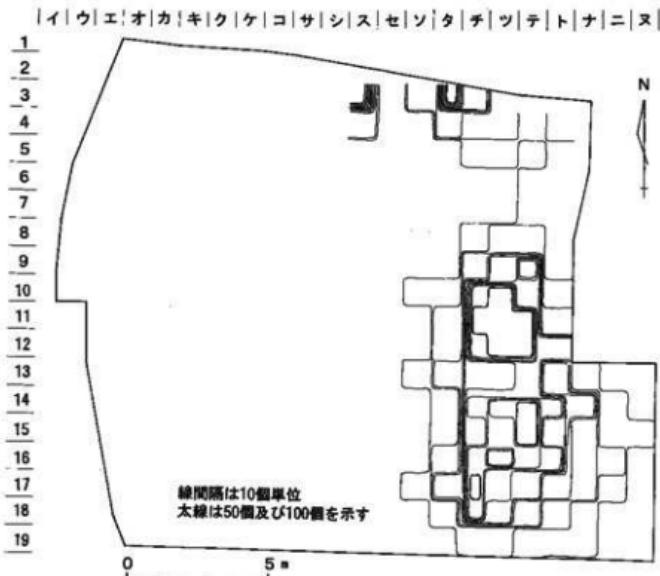
本遺跡出土の旧石器資料は、舟底形石器および横長剥片素材のナイフ形石器を主体とする石器群である。これらは基本的にプライマリーな状態で出土しており、遺跡東端の谷の縁辺には8群以上の濃密な石器ブロックの分布が認められる。

石器包含層は土層図3a～3e層の厚さ30～40cm範囲内に納まるが、3b層以下ではいずれの層も乾痕が著しく、石器はその乾痕の中で検出される例が多いことから、本来の包含層は3a層に限定される可能性が高い。なお、包含層下位には3条の流路が認められ、それぞれの埋土中よりAT火山ガラスが検出されている。したがって包含層の形成がAT以後であることは間違いない。

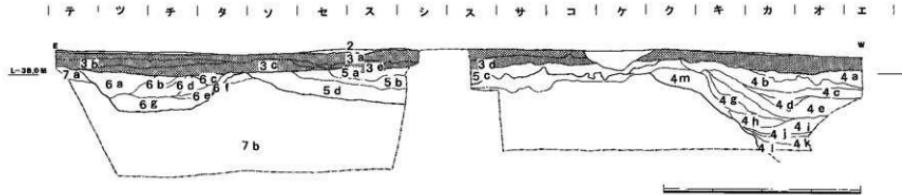
今回調査を行った3c区では10×5mの広範囲な石器ブロック1箇所と2m程度の石器ブロック2箇所が確認されている。いずれのブロックにおいても剥片、チップ類が非常に多く、これらが石器出土総数を増幅している。特にブロック中心部では1m×1mの範囲に100点以上の石器が普遍的に出土する。

石器石材はすべてサヌカイトである。

トゥール類の内容は舟底形石器が圧倒的に多く、ナイフ形石器は少量にとどまっており、舟底



第23図 3c区石器出土等量線図



- |     |           |                   |     |                                  |
|-----|-----------|-------------------|-----|----------------------------------|
| 2   | 紫灰色土      | (マンガンの沈着層)        | 4 k | 淡綠色砂混シルト                         |
| 3 a | 黄色細礫混粘土   | (粘性強い)            | 4 l | 暗綠灰色砂混粘土                         |
| 3 b | 淡黃橙色細礫混粘土 | (層の上面より乾痕あり)      | 4 m | 淡黃橙色砂混粘土                         |
| 3 c | 淡黃綠色砂混粘土  | (層の上面より黒色の太い乾痕あり) | 5 a | 明黃綠色細礫混粘土                        |
| 3 d | 黃綠色粘土     | (乾痕あり)            | 5 b | 淡黃綠色細砂                           |
| 3 e | 暗褐色土      | (マンガンの沈着層)        | 5 c | 黃灰色粘土質土                          |
| 4 a | 青灰色砂混粘土   |                   | 5 d | 暗褐色砂礫 (1cm程度の礫が多い)               |
| 4 b | 灰白色粘土     | (暗褐色粗砂をラミナ状に含む)   | 6 a | 淡灰白色粗砂                           |
| 4 c | 暗茶褐色細砂    |                   | 6 b | 灰茶色砂礫                            |
| 4 d | 淡灰白色細砂    |                   | 6 c | 黃灰色細礫混砂質土 (よくしまる)                |
| 4 e | 淡灰白色シルト   |                   | 6 d | 灰白色細砂                            |
| 4 f | 灰白色砂混粘土   |                   | 6 e | 淡灰茶色細礫混細砂層                       |
| 4 g | 灰黃白色細砂~中砂 |                   | 6 f | 淡黃橙色砂質土 (マンガンの沈着多い)              |
| 4 h | 乳灰白色僅細砂   |                   | 6 g | 暗褐色砂礫                            |
| 4 i | 暗灰色粗砂     |                   | 7 a | 暗褐色粘土                            |
| 4 j | 淡黃褐色細砂    |                   | 7 b | 橙色粘土 (層の上位は鉄分が多く、下位ほどグラ<br>イ化する) |

第24図 3c区16-17間東西断面図

形石器主体の石器群として認識できる。器種認定の検討や集計を十分に行っているわけではないが、現在までに舟底形石器60点余り、ナイフ形石器11点、石核14点を確認している。この他に舟底形石器の未製品の可能性がある二次加工のある剥片も一定量含まれている。

ここでは、近年舟底形石器主体の石器群が注目される現状に鑑み、当該石器群の技術基盤を反映する若干の資料を抽出して提示するものである。

以下、器種ごとに順を追って説明を加える。

#### 1) 舟底形石器 (1~14)

本石器群の主体となる器種である。製作途上で破損し廃棄されたと思われるものが目立つ。この内、先端部の小破片については未だ十分に抽出出来ていないために、これらを除いて合計41点を一覧表に提示し、内13点を図化した。これらは3つのブロックにほぼまんべんなく分布する。

長さは5~6cmのものが最も多く、次いで9~10cmにややピークが見られる。断面形状は三角形（A）、台形（B）、上辺斜行の台形（C）にわけられ、他に平行四辺形（D）が若干ある。これらは素材の形状、調整加工の違い等を反映しているようである。稜上加工の比率は断面形A類のものが95%と最も高い。甲板面の平坦加工は20%程にみられるが、部分的なわずかな加工にとどまる。甲板面ネガ、ポジの区別がつかないものも多い。

いずれにしても、2次加工によって先端を尖らせるという共通性が見られる。

#### 2) 二次加工のある剥片 (15~18)

数多くの剥片があるが、舟底形石器と同様の調整加工痕をもつ「舟底形石器未製品」と思われるものを抽出した。いずれも平坦打面をもつ横長剥片の側縁部および末端部に入念な加工を行う。15、16と17は大きさの点で異なるものの、先端部の加工を先行させ、その後に全体の形状を整えるという技術上の共通性が見られる。なお16は石核25と接合し、16の自然面側からの調整加工が素材剥片剥離前から行われたことがわかる。

#### 3) ナイフ形石器 (19~22)

国府型ナイフ形石器に類似するものが2点あり（21、22），それ以外は横長剥片素材の小型ナイフ形石器である。22は背面の剥離面が複数認められ、典型的な国府型ナイフ形石器とは異なる。

17は素材の背腹の両面の剥離方向が異なるもの。20は石核の打面を背面側に持つ「初期剥片」を素材とする。

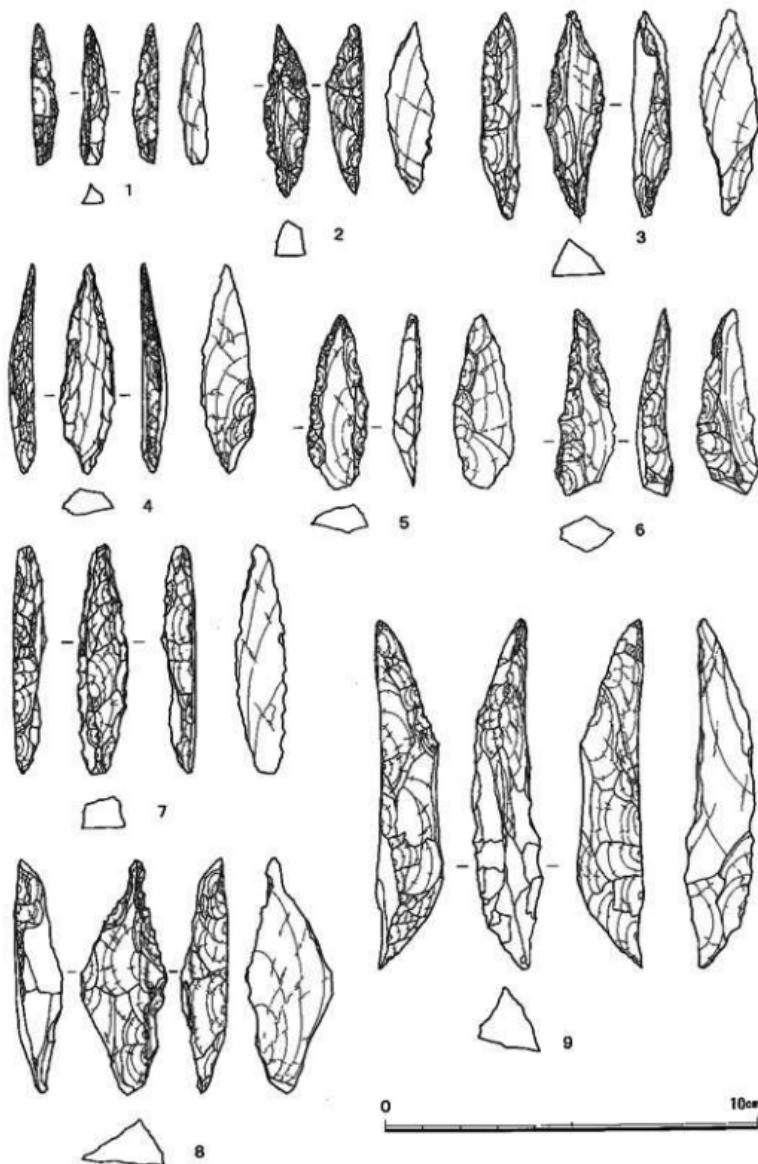
#### 4) 石核 (23~25)

確認できた石核の多くは作業面が一定しないもので、24のように石理を利用した交互剥離のものが目立つ。

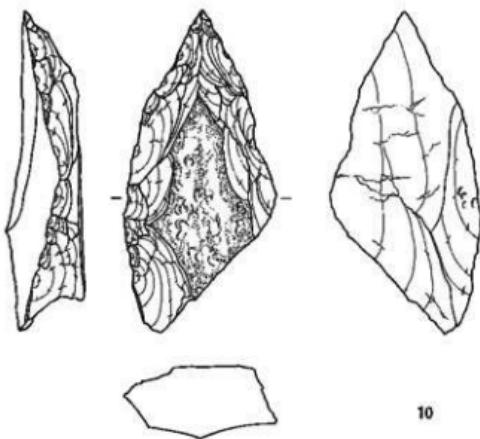
また、25は16と接合関係にある。自然面からの調整加工は16のそれに接続する。肉厚のかなり大きい段階から調整剥離を繰り返して大型のトゥールを目指す意図が看取され、ある段階で、交互剥離の横長剥片石核へ転化される。

挿図番号	遺物番号	グリッド	完成度	長さ	幅	厚さ	断面形	縫上加工	甲板面加工
1	50	チ16	100%	3.7cm	0.75cm	0.6cm	A	○	×
2	4021	ト5	100%	4.6cm	1.2cm	1cm	A	○	×
3	306	タ13	100%	5.6cm	1.5cm	1cm	C	×	
4	4037	ス5	100%	5.6cm	1.4cm	0.6cm	B	×	○
5	4034	チ11	100%	4.6cm	1.5cm	0.6cm	B	×	○
6	1803	ニ16	87.5%	※5.7cm	1.6cm	0.8cm	D	×	○
7	420	タ12	100%	6.1cm	1.35cm	0.8cm	B	○	×
8	9040		100%	6.3cm	2.3cm	1.2cm	A	○	×
9	1195	ツ14	100%	9.3cm	1.7cm	1.7cm	A	○	×
10	9002		50%		4.1cm	1.9cm	B	×	
11	462+67	ツ14・チ14	100%	11.8cm	3cm	1.9cm	C	×	○
12	121+67	チ13・ツ14	100%	10.3cm	1.8cm	1.7cm	A	○	×
14	102+67	ツ14・ツ14	100%	13.3cm		2.1cm	A		×
	1205	タ15	87.5%	※9.7cm	1.7cm	1.6cm	A	○	×
	2133	ソ16	83.3%	※8.6cm	1.8cm	1.3cm	A	○	×
	515	チ17	100%	7.9cm	3.1cm	2.3cm	A	○	○
	867	チ14	100%	6.9cm	1.9cm	1.7cm	A	○	×
	4012	チ12	100%	5.9cm	1.6cm	1.3cm	A		×
	575	チ13	100%	5.2cm	1.7cm	1.4cm	A	○	×
	BS40	チ12	100%	5.1cm	1.2cm	1cm	A	○	×
	470	チ15	75%		1.6cm	1.2cm	A	○	×
	2085	チ17	50%		1.6cm	1.4cm	A	○	○
	352	ツ15	33.3%		1.3cm	0.9cm	A	○	×
	547	チ16	16.6%		0.8cm	1cm	A	○	×
	22	ツ15	66.6%		1.1cm	1.3cm	A	○	×
	1777	ニ15	16.6%		0.8cm	0.9cm	A	○	×
	341				2.4cm	2.4cm	A	○	×
	4038	ス3	66.6%		1.4cm	1.3cm	A	○	×
	1662	ナ14	25%		1.3cm	1.2cm	A	×	×
	261	ソ16	50%		2.2cm	1.6cm	A	○	×
	2098	チ17	100%	4.4cm	1.4cm	0.7cm	B	×	×
	706	ト18	100%	3.7cm	1.1cm	0.6cm	B	×	×
	4002	チ9	75%		1.9cm	1.3cm	B	○	×
	1698	タ14					B	×	×
	1377	チ17	33.3%		1.2	0.9cm	B	×	
	376	ト16	50%		1.7cm	1.4cm	B	×	○
	2090	ツ17	25%		1.7cm	2cm	B	×	×
	4011	チ12	100%	6.9cm	2.3cm	1.5cm	C	×	×
	BS40	チ12	100%	4.7cm	1.4cm	0.8cm	C	×	×
	88	チ14	33.3%		1.1cm	0.6cm	C	×	×
	1888	ナ15	25%		1.4cm	1cm		×	×
	577	ト15	20%		2.5cm	1.7cm		×	×
	806	チ18							

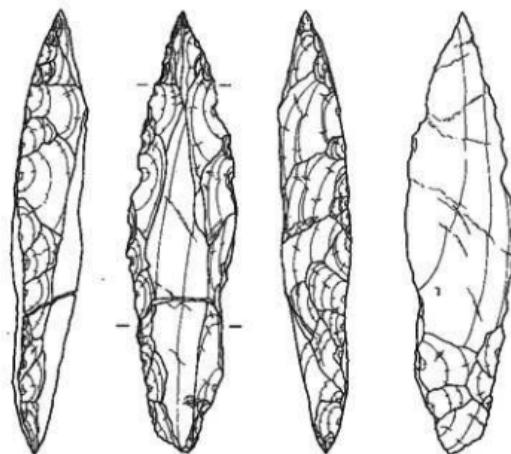
第3表 舟底形石器一覧表



第 25 図 石器実測図 1 (舟底形石器)



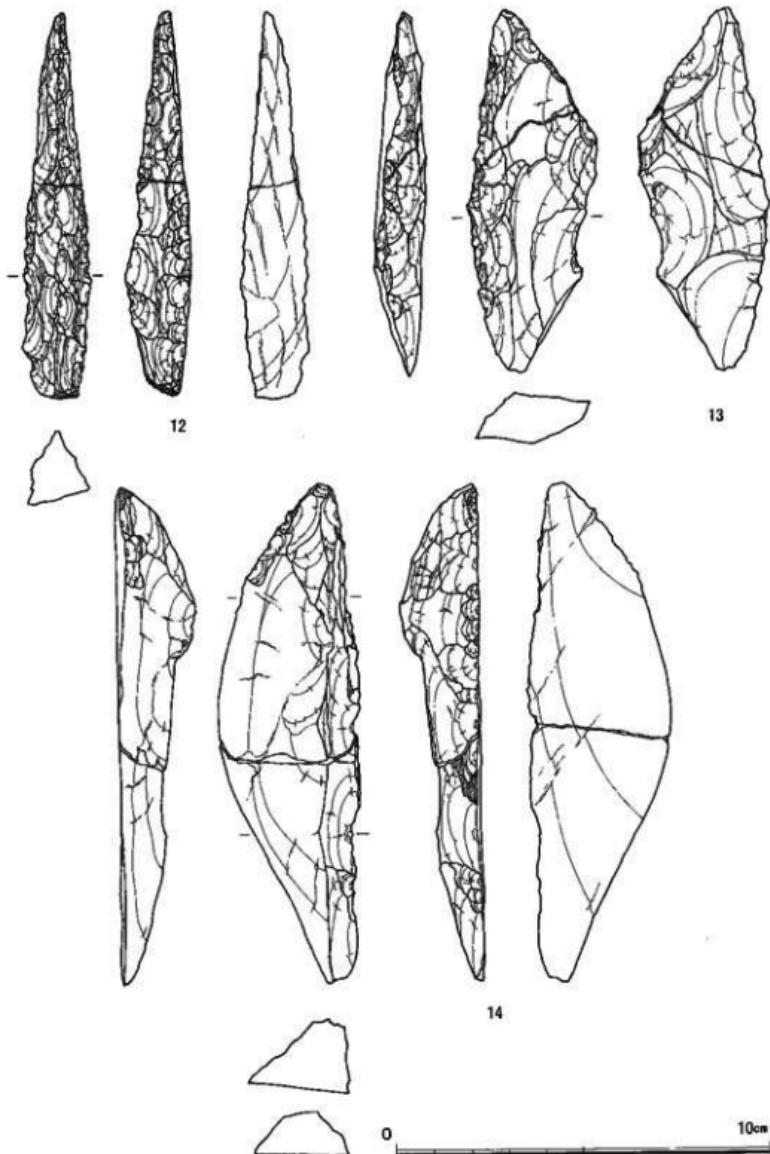
10



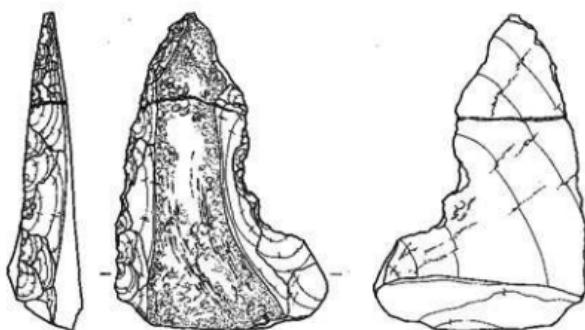
11



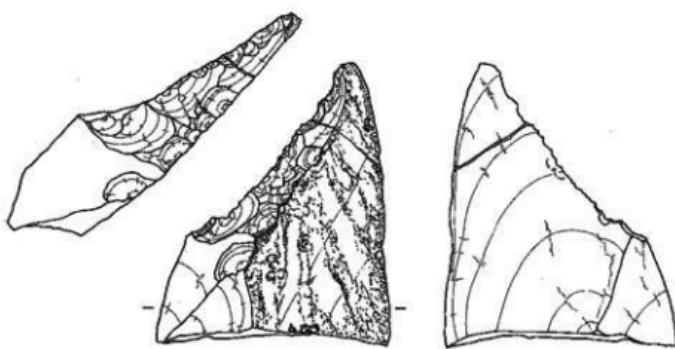
第 26 図 石器実測図 2 (舟底形石器)



第 27 圖 石器實測圖 3 (舟底形石器・同未製品)



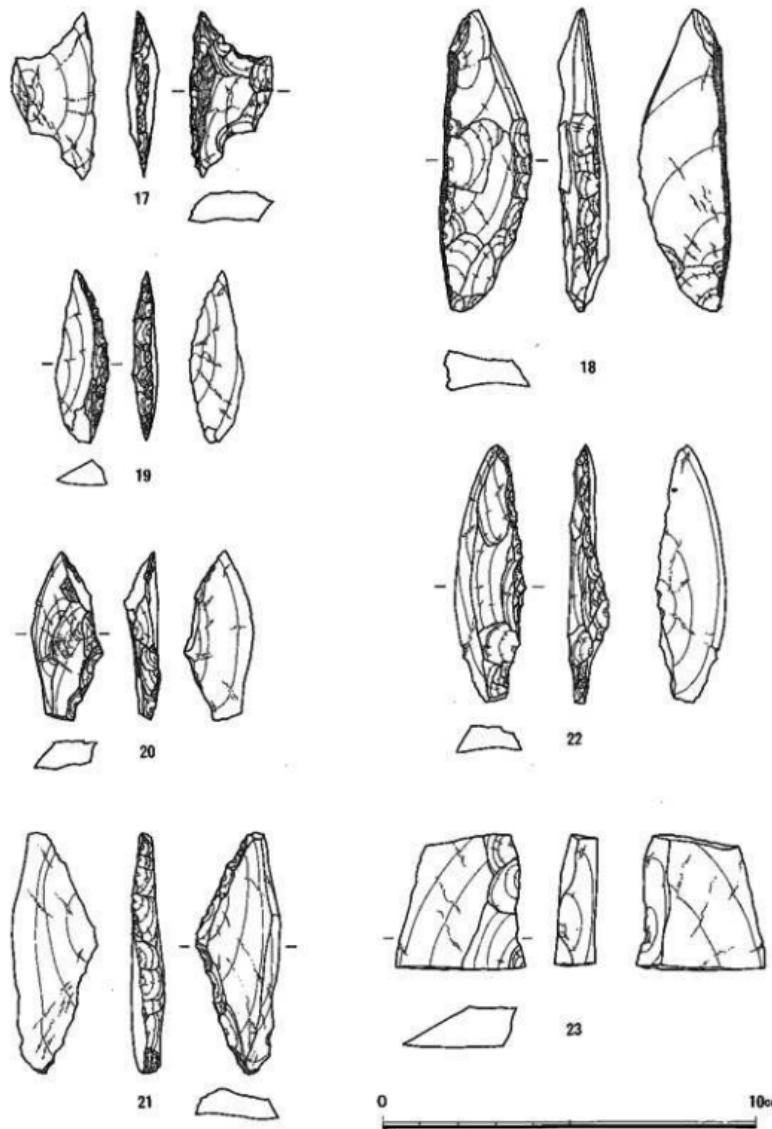
15



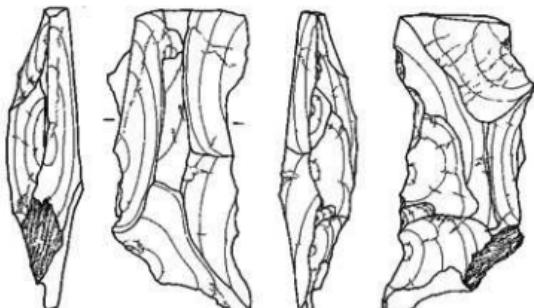
16



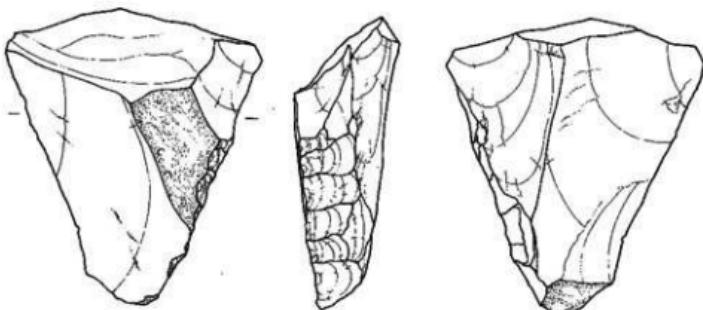
第 28 図 石器実測図 4 (二次加工のある剥片)



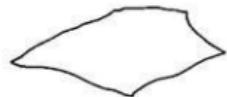
第 29 図 石器実測図 5 (二次加工のある剥片・ナイフ形石器・石核)



24



25



第30図 石器実測図6(石核)

## 5) 小結

本石器群で問題になるのは、瀬戸内技法との関連性である。今回、国府型ナイフ形石器等が少々出土したが、他の大多数は素材剥片の獲得において交互剥離を基盤とし、調整加工に主体をおいて整形するという技法上の一特徴を見いだせる。したがって瀬戸内技法との関連性については、現段階では否定的に考えざるを得ない。しかしながら、舟底形石器はその素材を限定して考えることが出来ないために、可能性としては複数の技術基盤が複合していることも考えられる。これらは今後接合等の作業を通じて検討をする必要がある。



写真 25 5d区 2号墳(奥), 3号墳(手前)



写真 26 5d区 2号墳 蓋石, 墓輪出土状況



写真 27 5d区 2号墳 周濠上層 塚形埴輪出土状況



写真 28 5f区 墓輪溜り



写真 29 3c区(南半) 旧石器分布状況



写真 30 3c区 舟底形石器出土状況



写真 31 5d区 旧石器調査風景



写真 32 5d区 2号墳調査風景

四国横断自動車道建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査概報

平成3年度

平成4年2月29日

編集 (財) 香川県埋蔵文化財調査センター

発行 香川県教育委員会  
(財) 香川県埋蔵文化財調査センター  
日本道路公团 高松建設局

印刷 タナカ印刷株式会社